『地の糧』における列挙の構成

—多様性の問題をめぐって—

津　川　廣　行

1° 序論：ジイドの『地の糧』では，「列挙」（énumération）とでもよぶべき表現法が駆使されている。拙論「『地の糧』における列挙の問題—そのテーマと対象について—」[1] で筆者はすでに，「列挙」とは，ある何らかの「テーマ」にそって何らかの「対象」をかぞえあげることであるとし，まずこれらの用語にかかわる一般的ないし基本的な若干の考察をおこなった。つづいて，『地の糧』の列挙におけるテーマや対象についての具体的な考察をおこなった。そこでは，この作品において列挙された事物の内容，実態を，意味論的観点からえられる手掛かりにしたがって検討することが主たる目的であった。（『地の糧』で「列挙」が用いられている箇所の一覧については，以上の拙論にまとめた表を参照されたい）。

本論文では『地の糧』における列挙の形式とでもいうべきものについての考察がなされる。列挙という修辞法は，事物にかんする分類法，整理法の一つであり，列挙された諸事物に，ある秩序を，すなわち関係の形式をもたらすものと思われる。列挙は事物の多様性を切り詰めつつ整理する。（ただし，すでに整理された秩序に準拠する，引用としての列挙は別とする。たとえば，すでに整理されているリストの項目を再列挙したとしても，分類や整理がそれ以上に深まるとは言えない）。

本論文での研究対象となるのは，この引用としての列挙ではなく，事物の多様性を切り詰めつつ整理する列挙である。もっともこの整理されるべき多様性は『地の糧』では描かれることなく，次のようにただ暗示されているばかりである。「不揃いに揺り動かされる諸々の枝…。それは，一本

---

(1) 大阪医科大学紀要「人文研究」第15号に掲載の予定。

一本の小枝の多様な弾性が，風にたいするそれらの抗力を多様にすることによって，風がそれらに与える衝撃をもまた多様にするからである」[2]。この暗示された，きめこまやかな多様性はまた，「人々が事物の多様性に期待をかけるよう望んだ」[3]ジイドの，スローガンとしての多様性でもある。もっとも言語活動（ランガージュ）にあっては，この秩序なき多様性を模倣する人工的秩序こそが多様性である。『地の糧』にあっては，秩序へとやむなく切り詰められたようにみえる列挙の形式の方こそが，事物の多様性について積極的に語っている。ここでは至って，あの言い尽くされぬ多様性こそが列挙の形式の多様性を模倣しているはずである。

ところで列挙一般の最も基本的な形式を構成する二重の関係は，（列挙された諸々の対象のあいだに存する）差異と同一性である。（もし対象間に差異がないならば列挙によって言い重ねる意義がうしなわれてしまうし，またもし対象間に同一性がないならば列挙の「テーマ」がうしなわれてしまう）。しかしこの基本的形式は第一に，その「差異」によって事物の多様性を暗示しもするが，第二に，その「同一性」によって，事物の単一性をも暗示してしまう。

いずれにせよ，列挙一般にみられるこの基本的形式はきわめて簡素である。この幾何学的に刈り込まれた列挙のシステムを超え『地の糧』の列挙が，より雑然とした多様性の趣きを示すとすれば，そこにはより微妙な工夫が添加されているはずである。『地の糧』という一作品の列挙がそれなりの特徴をもつとすれば，このプラス・アルファの部分においてであろう。

（以下，『地の糧』から「列挙」の例としてとりあげる比較的長い文にかんしては原文のまま引用することにした。また，ごく短い用例や，「列挙」をふくまない文，また研究書からの引用は日本語に訳することにした。）

---

(2) André Gide, *Les Nourritures terrestres*, Pléiade, t. Ⅲ, ≪*Romans, Récits et Soties, Œuvres lyriques*≫, Gallimard, 1975, p. 226.（以下，同作品からの引用については，頁数のみを記すことにする）。

(3) p. 186.

2° 差異の差異：『地の糧』の列挙においては，その差異のあり方は必ずしも一様ではなく，差異を差異化するような差異，いわば差異の差異，二次レベルでの差異が見出される。『地の糧』の列挙に雑然とした不整合な手ざわりを加味しているのは，この二重化された差異である。

ここで「本」の列挙(4)について考えてみよう。その列挙の項の数は決して少なくはないけれども，それらはいくつかの群に分類される。たとえば，「学校の机で読む本」「歩きながら読む本」「森で読む本」「乗合馬車のなかで読む本」などは立派に差異化されているとしても，その差異のあり方には，ある共通な性質（差異の同一性）がみられる。ここで差異の基準となっているのは共通して≪本を読む場所≫なのであるから。同様に「四スーもしない本」「値の張る本」の場合，その差異の基準は≪本の値段≫である。このような差異の基準としてはその他，≪本が著者や読者におよぼす効果≫≪本の評判≫≪本の編集の体裁≫≪本の主題≫などを数えうる。これらの基準は「本」をテーマとする一種の列挙の対象となっている（二次の列挙）。さらにそれぞれの基準は，自らをテーマとする，より差異化された列挙をしたがえている（一次の列挙）。たとえば≪本を読む場所≫という基準は，「学校の机で読む本」「歩きながら読む本」「森で読む本」などをしたがえている。（低次から高次へと組み立てられたものを，我々は高次から低次へと解いてゆく）。結局，「本」の列挙全体との関係でみわたすならば，「学校の机で読む本」などという列挙の対象は二重に差異化されているといえる。（第二段階→≪本を読む場所≫；第一段階→≪その場所の具体化≫）。

3° 比較の基準を異にする比較：二重化された差異をもつ列挙において，その差異の基準は，列挙された事物の価値の比較をする際に必要な，同一性の基準でもある。たとえば「四スーもしない本」「値の張る本」において≪本の値段≫（差異の基準）は本の価値判断をする際の基準ともなっており，「青い泉」「緑の泉」における≪泉の色≫の場合には，各人の色

(4) pp. 163—164.

彩感覚による評価が可能であろう。「岩間から迸る泉」「氷河の下から湧きでるのがみえる泉」[5]の場合にも，≪泉が湧出する場所≫という点において比較が可能である。

同一性と差異という二重の関係に支えられた列挙の基本的形式は一般に，比較をするのに恰好な舞台となっている。というのは比較が可能であるためには，比較されるべき対象間に，列挙の場合と同種の二つの関係，同一性と差異がなければならないからである。（もし全く同一であるなら比較の必要はないし，全く違っているなら比較のしようがない）。

ところが「青い泉」と「岩間から迸る泉」とを比較することは簡単ではない。なぜならこの二種類の泉は，差異の基準，比較の基準を異にするからである。「青い泉」より「岩間から迸る泉」の方が好きだとは言えない場合もある。なぜなら「岩間から迸る，青い泉」もあるからである。つまり，「青い泉」と「岩間から迸る泉」は，比較の舞台にのせられながらも比較され得ない。事物はここで，比較の不可能性を証するためにこそ比較されている。（なぜなら，二つのものを並べてみなければ比較できないことさえわからないから）。

事物を比較できないものとすることは，比較における同一性の基準，列挙における差異の基準が複数化される際，この基準にたいする基準，基準の基準がないことを意味する。この無基準，この無秩序のうちに置かれることによって『地の糧』の事物は多様となる。

4°　差異の組み合わせ：『地の糧』の列挙における各項の差異はごく少数の観点から，また多くの場合もっと極端に，ただ一つの観点からたてられている。たとえば，『地の糧』には「≪歩きながら読む≫本」や「≪王と后について語る≫本」や「≪四スーもしない≫本」は登場しても，「≪歩きながら読む≫，≪王と后について語る≫，≪四スーもしない≫本」は出現しない。

一般に，様々な観点から差異をたて，これを連ねたときのほうが，その

(5)　p. 216.

列挙の対象の像は明確化されるように思われる。これに反し「四スーもしない本」などという表現は，すこぶるそっけない。ところが，列挙の多様性という点からみると，舌足らずにみえる方こそが饒舌である。もし「歩きながら読む，王と后について語る，四スーもしない本」があるとするなら，このような言葉数の多い表現は，より多く限定されているただ一種類の特殊な本を示すにすぎない。「学校の机で読む，赤貧の人々について語る，値の張る本」という表現があるとすれば，これもまた，ただ一種類の特殊な本を指すにすぎない。他方「歩きながら読む本もあり学校の机で読む本もある。王と后について語る本もあれば赤貧の人々について語る本もある。四スーもしない本もあれば値の張る本もある」というとき，排他的であるのは同じ差異の基準にしたがうパラディグム（つまり，「歩きながら読む本」と「学校の机で読む本」，「王と后について語る本」と「赤貧の人々について語る本」，「四スーもしない本」と「値の張る本」）だけであり，その他の場合には自由な組み合わせが可能となる。「学校の机で読む，王と后について語る，四スーもしない本」もあれば，「歩きながら読む，赤貧の人々について語る，値の張る本」もありうる。結局その組み合わせの数は今の場合２×２×２＝８となる。『地の糧』の列挙における差異の組み合わせはこのようにして，増殖する可能性を秘めている。この可能性は，事物の多様性を暗示する。

５°　比較の基準の比較：『地の糧』における列挙は，新聞のチラシなどにみられるような商品の列挙とは様子が違っている。たとえば仮に冷蔵庫についての列挙を想定してみよう。『地の糧』の作者ならこう列挙するだろう。「ワンドアの冷蔵庫もあれば，ツードア，スリードアの冷蔵庫もある。Ａ社の冷蔵庫もあればＢ社のもある。容量が77リットルの冷蔵庫もあれば145リットル，205リットルのもある。ワインレッドの冷蔵庫もあればホワイトアーモンドのもある」。組み合わせ可能なこれらの差異がどれほど冷蔵庫の多様性を暗示しようとも，客にとって必要な情報はむしろ，ツードア，145リットル，ホワイトアーモンドの冷蔵庫がＡ社から出てい

る〔いない〕というときの，ワンセットになった差異群である。商品の仕様を示すこのセットを勝手に組み変えられないがゆえに，消費者はまず「比較の基準」の比較をおこなわなければならない。つまり，205リットル型をA社では製造していないかもしれないから，この場合には≪メーカー≫（具体的には「A社」）か≪容量≫（具体的には「205リットル」）のいずれかを優先させなければならない。（その結果甘んじてB社の205リットル型か，A社の145リットル型を買うこととなろう）。

これに反し，差異がワンセットになってはいない『地の糧』の列挙の場合には，比較の基準の比較をおこなっても無駄である。ここには，「A社の」などという差異と「205リットルの」などという差異の組み合わせを阻む理由は少しもないからである。『地の糧』では，自由に組み合わされた差異群という「仕様」にしたがう事物は，すべて存在してしまう。つまりここでは，ある差異の基準にしたがう事物は，他の基準と排他的であることなく無条件に存在する。「四スーもしない本」は絶対的に，あるいは無条件に存在する。かくして，一見そっけなく言いあらわされたようにみえる「四スーもしない本」は，強い響きをおびる。

6°『地の糧』というカタログの非実用性：『地の糧』は，その語り手が架空の読者ナタナエルにむかってなす，旅の報告書であるという体裁をとっている。列挙の場合にもその聞き手は同じくナタナエルである。（もっとも，『地の糧』に挿入されているいくつかの歌 Ronde de la Grenade, Ballade des plus célèbres Amants, Ballade des Biens immeubles, Ronde des Maladies, Ronde de tous mes Désirs の場合，列挙が多用されているこれらのロンドやバラードのうたい手はそれぞれ Hylas, Moelibée, Mopsus, Guzman, Cléodalise であると記されてはいる。しかし『地の糧』の語り手はナタナエルに，彼等のロンドやバラードの引用者・報告者としてまさしく語りかけているといえる）。

『地の糧』は，その語り手がナタナエルに与えた情報である。その列挙は，彼が見聞した事物をナタナエルのためにまとめたカタログである。だ

がこのカタログは実用向きではない。

その理由の一つは前節に示されている。つまり『地の糧』の列挙では，基準を異にするときの，差異と差異のあいだの関係——排他性だとか非排他性だとかという関係——についての実情がぼかされている。たとえば「王と后について語る，四スーもしない本」の実際の存否については語らない『地の糧』は，実用的な「読書案内」であるとはいえない。その理由の第二番目としては，『地の糧』の列挙の非網羅性を挙げることができる。すべての項目を遺漏なくあげてこそ，カタログは役立つのであるから。あるテーマにかんして，（実際になされた列挙の項目数）÷（漏れなく列挙した場合の全項目数）＝（飽和率） とするとき，『地の糧』の列挙では多くの場合この飽和率が極めて低いこと（つまり非網羅的であること）は検討済みである。第三番目の理由としては，『地の糧』の列挙の差異の立て方が「主観的」である点をあげなければならない。ただし「主観的」とは，事物にたいする差異の設け方が，これを享受する人間の状況に依存している場合をさすものとする。ちょうど，≪Il y en［＝des fruits］a que nous mangeons sur des terrasses.／Devant la mer et devant le soleil couchant.≫[6]の場合におけるように。ここで問題なのは事物にたいする，一個人の接し方である。

『地の糧』というカタログが語るものは，語られる事物の非実用性ではなく，その語り方の非実用性である。（「果実」「泉」などは実用ともなりうるから）。この非実用性は，『地の糧』の列挙を饒舌にしている。第一に，差異同士の排他性の問題に気を配る必要のない，気楽な列挙が可能である点において。第二に，『地の糧』というカタログの不完全性，つまりその飽和率の低さが，列挙の対象をピック・アップする際のスピード，畳みかけるような舌の勢いを増している点において。（これに反し，飽和率があがればスピードは鈍るであろう）。第三に，非実用的列挙にみられる「主観性」が，差異の基準を増殖させている点において。

---

(6) p. 194.

また，『地の糧』というカタログを非実用的にしている第四番目の理由については，次節に示そう。

7° 列挙の地理学——その位置関係の曖昧さについて：列挙された各項はそれぞれ指向対象をもつとみるとき，『地の糧』にはそれらの位置関係を決定する手掛かりが不足している。ナタナエルがもし「観光案内書」として『地の糧』を携え，その語り手が刻んだ旅の轍を踏もうとしても，そこで語られている事物を「同定する」(identify)[7]ことは殆どできないだろう。地理学に通じているとするならナタナエルは，ナポリだとかスミルナ[8]などという地名によって名指される土地を再訪問できはしても，「オアシス」[9]「砂漠」[10]などという普通名詞を前にするや，とまどってしまうであろう。ましてや，「泉」(sources)「庭園」(jardins)[11]「果実」(fruits)[12]「道」(routes)[13]におけるように，一括して複数形で示されている事物にかんしては，事情はさらに複雑となる。また番号つきの列挙「最初の扉，二番目の扉，三番目の扉…」[14]だとか，「次のオアシス」(la suivante)[15]などにおいても，その順番の意味を明らかにするための≪ディスクールの状況≫(situation de discours)[16]は曖昧である。

(7) ≪Very often, the other, the hearer knows what, or which, particular the speaker is talking about ; but somestimes he does not. I shall express this alternative by saying that the hearer either is, or is not, able to *identify* the particular referred to by the speaker.≫ (P.F.Strawson, *Individuals*, Methuen & Co Ltd, 1964, p. 16.)

(8) p. 224.

(9) p. 235.

(10) pp. 238—239.

(11) pp. 177—180.

(12) pp. 193—196.

(13) p. 166.

(14) pp. 210—214.

(15) p. 235.

(16) Ducrot／Todorov, *Dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, ≪Points≫, Seuil, 1972, p. 405, および pp. 417—422.

なるほど地名などの固有名詞をちりばめようとも，『地の糧』はあくまでフィクションである。そして，あらゆる文学作品は多かれ少なかれ，架空の≪ディスクールの宇宙≫（univers de discours）[17]を形成する力をもつ。しかし，架空の宇宙における事物も，作品内での関係の糸で結ばれることによって，ある定まった位置を占めるということがあってよいはずである。これに反し『地の糧』で列挙される多くの事物は，突如「何々がある」（il y a...）という言い回しによって導入されるのみである。

とすれば，『地の糧』の語り手はたとえばかくかくの泉がどこにあるかを伝えようとは思っていないと考えなければならないだろう。またナタナエルもこれを同定する必要はない。語り手が強調しているのは，かくかくの事物がどこにあるかではなく，とにかくまさにあるということだと考えられるからである。事物があることを強調するためには，その場所を指定してはならない。なぜならそのときその存在は，位置関係という相対的関係のうちにとりこまれ，読者はこの関係をしか見なくなるからである。

『地の糧』では，「ある」（il y a）という言い回しが随所にみられる。この言い回しは単に列挙の対象を導入すべき重宝な表現として使われているだけではないだろう。この il y a は，「泉」などとは違ったメタフィジックなレベルでの一種の列挙のテーマとして殊更に用いられている。つまり『地の糧』では，「ある」物の列挙がなされている。「ある」物が「ある」のである。またこの作品で多用されている「私は何々を見た」（j'ai vu...）という表現もまた，「私」が介入するときの il y a の変種であるといえる。

8° 列挙のトートロジー：列挙のテーマとは，その意味あいを列挙の対象へと隈無く注ぐ太陽である。だが『地の糧』において，それはいわば黒い太陽である。なぜなら，「泉」であれ「本」であれ列挙のテーマ自身についての委しい説明は欠けており，この説明不足，この言い落としによって，列挙のテーマは自らを蔽い隠すからである。「歩きながら読む本」

(17) *Ibid.*, p. 317.

「四スーもしない本」「王や后について語る本」などがあるという。本は様々に差異化されている。だが列挙のテーマとしての同一者である「本」自身については語られない。語る必要もない。なぜなら「本」とは誰もが知っているあの≪本≫であり，要するに本とは本なのだ。このようなトートロジーへの依存によって，列挙のテーマは説明されない。この説明されないテーマ，この黒い太陽こそが，これに付き随う列挙の対象を照らしだす。なるほどことばは，説明もなく使われて然るべきではある。だが列挙のテーマは，太陽系の中心とでもいうべき特異点に位置するから，特別な扱いを受けなければならない。

ここでプルーストにおける「朝」と，ジイドの「朝」とを比較してみよう。『失われた時を求めて』の話者がバルベックへ行く途中，列車のなかで迎えた朝の描写はプレイヤッド版にして五十行の多きにわたっている[18]。そのくだりのなかでただ一回登場する「朝」という語（正確には「朝の情景」la scène matinale という形容詞の形で現われる）は，その箇所で委しく描かれている情景——ある朝の情景——を受け直すものではあっても，その特殊な情景を描きだすのに参与してはいない。極言するならこの「朝」は，具体的に情景を説明する語ではなく，具体的な情景によって説明されるべき語である。この「朝」と比べてみるために，極めて不完全ではあるが列挙をなしている，『地の糧』の「朝」を引用しよう。≪Il y a des matins et des soirs.／Il y a des matins où l'on se lève avant l'aube, plein de torpeur.— O gris matin d'automne ! ≫[19]. この「朝」は，一日のうちの時を指定し，その情景を喚起するのに不可欠な語として登場する。朝は朝として，泉は泉として自ら光を発しないならばその列挙は理解不可能となる。（これに反しプルーストにおける上述の「朝」は削除可能であるといっても過言ではない。——すなわち文意をさほど損なうことなく，la scène matinale における matinale をとることができよう）。

(18) Proust, *A la recherche du temps perdu*, Pléiade, t.I, Gallimard, pp. 654—655.

(19) p. 205.

『地の糧』におけるこのようなトートロジックな「朝」は列挙のテーマとして最適である。なぜなら，いかなる朝も朝として同一であるから。（これにたいしプルーストにおける朝の情景は，二度と繰り返されないような微妙なニュアンスをもっており，列挙に適さない）。

『地の糧』の場合の単純で明瞭な「朝」は，プルーストの場合に比して貧弱にみえようとも，それなりの効果をもたらしている。この「朝」は列挙の中心点，特異点であり，人間の視線は自然にこのような特異点へと向かう。そして我々は，期待に値するものを凝視するのと同じくらいにまた，凝視してしまったものに期待をかける。列挙のテーマという黒い太陽の乏しい光を補うものは，作者自身をも含めた≪読者≫のこのような思い入れである。この思い入れによってこそ『地の糧』の列挙のテーマは輝きをます。

列挙におけるトートロジーの効果を思い入れによって補強すべく読者との黙契を成立させるためには，そのテーマはポピュラーでなくてはならない。たとえば「キレート化合物」についての列挙を行なうとしたら効果は激減するだろう。その点ジイドは列挙のテーマとして，月並みといえるほどに詩的な，あまりにも詩的なテーマを選ぶことを辞さなかった。「果実」「朝」「泉」「オアシス」「砂漠」「庭園」[20]「隊商」[21]「らくだ」[22]，このようなテーマはそれだけでもう，鼻につくほどの詩的イメージを発している。彼は「泉」なら「泉」という列挙のテーマを委しく描くことはしなかった。が，これに眼を向けさせることによってその美しさを喚起させたのであった。

9° 差異化された事物の等価性：『地の糧』で列挙された事物は，列挙のテーマを同じくするがゆえに何らかの共通点をもつと予想される。しかし，たとえば様々な泉の共通点は，それが一様に≪泉≫と呼ばれているところにあるだけではないだろう。「私は今や，この大きな神の泉におけ

(20) pp. 177—180.
(21)(22) p. 237.

るあらゆる水滴は〔互いに〕等価である（s'équivaloir）ということを理解した」[23]とジイドは書く。（この「神の泉」は，地の糧を湧出するという比喩的な意味での泉であるとみてよい)。形状こそ違え，ここで一つ一つの「水滴」は等価であるとされているが，『地の糧』の諸事物におけるこのような等価性にかんしてのジョルジュ・プーレの意見を要約すれば，それらは人間にあたえる至福の感触において等しいのである[24]。個々の事物は，いずれも全き幸福感を与えてくれる点において等価である。差異化された多様な世界は，文字通りの意味において均質であるわけではないが，『地の糧』においては世界は均質であるかのごとくであり，したがって事物の一部分は，世界の全体を語るサンプルとなりうる。「おまえ［＝砂漠］の極めて小さな砂粒さえもがその僅かな場所にとどまりながら宇宙全体を物語ってほしい」[25]という『地の糧』の一節を引用しながらジョルジュ・プーレは，この作品では「世界は砂粒のなかにあり，大宇宙は小宇宙のなかに，球体は点のなかに，無限大は無限小のなかにある」[26]という。この小さな砂粒は,世界について語るがゆえに輝かしい[27]。全き幸福をあたえてくれるこの等価な,「均質な」世界には神々しさが付与される。「どこに行こうと君は，神以外の者に会うことはできない。――神とは我々の眼前にあるもののことだ」[28]。『地の糧』の列挙における同一性という関係は，差異化された事物の等価性に基づくこのような汎神論にゆきつく。

10° 結論にかえて――列挙の遠近法：『地の糧』における事物の，以上のような等価性が語るものは，列挙された対象は互いに異なってはいても同じだという，差異と同一性との同一視であり，多様性と単一性との単

(23) p. 184.

(24) Georges Poulet, *L'Instant et le Lieu chez André Gide*, ≪André Gide 3≫, Lettres Modernes, 1972, pp. 59—60.

(25) p. 239.

(26) Georges Poulet, *op. cit.*, p. 61.

(27) これらの砂粒は一面で，世界をうつす鏡としてのライプニッツのモナドを思わせるが，それにしても『地の糧』においてはそれらは「等価」である。

(28) p. 155.

一化である。もっともこの同一視，この単一化は不安定であり，瞬き一つで崩壊してしまう危険をはらんでいる。なぜならこの等価性は証明されたというより，望まれたものであるにすぎないから。列挙の対象の差異は突如として，列挙のテーマの普遍性にたいし異議をとなえる。たとえばある「果実」は，これとパラディグムをなすイチジクやスモモと対立するだけではなく，≪果実≫全般と対立することがある。≪Leur goût écoeurait tout d'abord, étant d'une fadeur incomparable ; ／Il n'évoquait celui d'aucun fruit de nos terres≫[29]. また，≪A Tunis, il n'y a pas d'autre jardin que le cimetière.≫[30]において「墓地」は，その列挙のテーマ≪庭園≫と容易には馴染まない。この「果実」，この「墓地」はそれぞれのテーマに背くことによって，列挙の周辺部，列挙の余白を彩りつつ，そのテーマの祭典へと協賛する。なぜならそれらは背反しながらも，≪果実≫という，また≪庭園≫というテーマのもとに列挙されているからである。かくして，崩壊の危機に瀕したあの同一視，あの単一化は安定をとりもどす。

このような，危うい，微妙な列挙の機構は読者の視点にたいし時として，遠近法とでもいうべき効果をもたらす。既知のものは近くに，未知のものは遠くにあるとするとき，読者は気の持ちようによって列挙の対象を，近くにあるとみることも，遠くにあるとみることもできる。なぜなら列挙の差異は，既知なるものとしてのテーマに迎合したり反発したりするからである。『地の糧』は旅の報告書，未知なるものを既知なるものにしようという報告書，しかも非実用的な不完全な報告書であるからなおさらである。このような遠近法こそが『地の糧』の列挙における詩の深さを決定づける。そして，ヨーロッパからみた異国，北アフリカやまた時に地中海岸を含む近東などを話題の舞台とする『地の糧』において，列挙の遠近法は時としてエグゾチスムを招来する。『地の糧』の語り手が触れた果実は（五官にとって）なんと近くに，また（ヨーロッパから）なんと遠くにあっ

(29) p. 194.

(30) p. 180.

たことか。報告された名も知れぬ果実は読者にとって，なんとまさしく果実であり，なんとまさしく果実でなかったことか。この近さと遠さのあいだに横たわる広がりは，『地の糧』で繰り返しのべられる「欲望」（désir）の，「期待」（attente）の，また「渇き」（soif）の源泉である。≪Il y en a dont la chair paraît toujours froide, même l'été.≫[31]というときの果実に食欲を感ずるとすればそれはこの果実が，汁気の多い何らかの既知の果実を思わせると同時に，（その名が伏せられているがゆえに）この世にはほとんど有り難い未知の果実を思わせるからではないだろうか。この一つの差異における近さと遠さのあいだの落差は，距離感覚の喪失によるめまい，錯乱，そして，感動の大きさを物語る。

『地の糧』の列挙における差異は結局，差異の差異などというからくりをもとうとも，事物の多様性を描きだすにしてはあまりに簡潔であり，その骨組みを構成することによってせいぜいこれを暗示するにとどまっている。だがその簡潔さは，『地の糧』の語り手の感動の激しく短い呼吸に対応すると同時に，そのそっけなさ，その故意の言い落としのゆえにかえって，読者にエグゾチスムをもたらし，これを旅へ，列挙のテーマ巡礼の旅へ向かわせようとするのである。

（本学非常勤講師）

(31) p. 195.